

都市林・都市近郊林のあり方を考える (I)
—その利用と保全—

苫東緑地にみる緑と人
——時代とあゆむ緑地——

くさ かり たけし
草 薊 健

はじめに

苫東工業基地を特色づける広大な緑地の利用はまだ始まったばかりだが、「緩衝」という当初の目的と、基地で働く人や市民による「利用」あるいは「活用」のバランスは変化のきざしが見えている。また日本における「工業」と「緑」の関係も少しずつさらに親しいものへ変わっていきこうとする傾向にあるようだ。

苫東の緑地でも市民利用は年々盛んになりつつあるが、緑地利用や森林の管理などのセクションにかかわってきたものの一人として、市民や基地で働く人と緑の接点などについて日頃考えるところを述べてみたい。

苫東の緑地のあらし

苫東と略称される苫小牧東部大規模工業基地は、国と道が一体となって計画したもので昭和46年8月の北海道開発審議会が開発基本計画(案)が了承され始動した。

石油精製、石油化学、自動車、石油備蓄などとその関連産業の工業用地が約5,650ha、緑地・公園用地として約2,880haが確保され、その他を含めた総面積は11,250haである。また、「公害のない緑豊かな」工業基地建设を目標として掲げ、米国のインダストリアルパークの形成を目指している(図-1)。

用地は、4年度末まで計63社に852haを分譲した。緩衝緑地の一部については道が200haあまりの緑地造成を行う一方、工業用地の造成と分譲を業務とする当社(苫小牧東部開発株)では、昭和40年代の終わりから、緑化のベースになる植栽試験や植樹会を実施したり、工業用地造成の一環としての公園の造成を行っている。また既存林を対象に森づくりを進めるなど基地全体の維持管理も行ってきたが、恒久的な緑地の管理主体が未定であるため、検討が進められている。

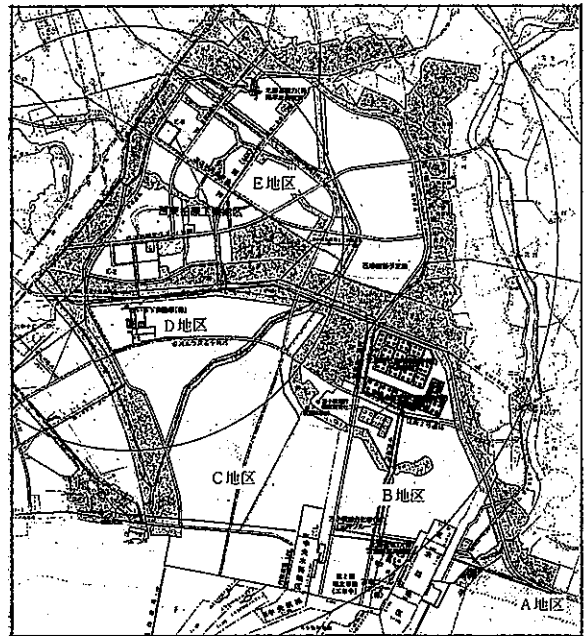


図-1 苫小牧東部工業基地開発計画平面図(陸上部抜粋)

緑地をめぐる試み

「都市生活者の心身の健康に不可欠な」¹⁾緑、都市林というとらえ方を念頭におくと、苫東の緑地は林のほか湿原も草地もあわせもった多様な「緑」にあたるが、そんな中で営まれる「緑」と「人」との関係の足どりをいくつかたどってみよう。

①緑地の市民開放

50年代の半ばから大型の企業立地が進む一方で、内陸部である柏原地区では視察者が「ひと気がない」「殺風景」などとして立地を見合わせるケースが相次いだ。

このような状況を真剣に受けとめた苫東の現地ではふたつの動きが始まった。ひとつは工業団地の修景であり、もうひとつは「ひと気」づくりである。苫東における本格的な緑地利用は、このようなひとづくりの一環として市民に開放され、スタートした。もともと、ハスカップや山菜のシー

ならないだろうか、という点も保育に向かわせる理由のひとつだったと思います。

ギブアンドテイクの作業のしくみ

伐採して材を売却することで金銭的にペイするかどうかにこだわると、苫東のような二次林はまったく間尺にあわない、ということになります。

10年ほど前のことになりますが、ある林業の関係者が苫東の緑地を訪れて、ほだ木生産の可能性をみていきました。その方は帰り際に「皆伐しないと採算があわない」と結論を下しました。苫東の緑地では元来林業のために皆伐する状況ではなかったもので、ほだ木の話はそれきりになりましたが、採算とか間尺というのを林にあてはめると、ずいぶん乱暴な話になってしまいます。けれども、材を必要とする人、作業する人、林の手入れを進めたい森林所有者の3者がとりあえずうまいことつながれば、きっと活路はあるはずだという思いはそのまま温めておくことにしました。

苫東の雑木林の保育は、ほだ木の安定的供給の一助に材を提供して欲しいという厚真町からの要望の声（平成3年）が発端となりました。実はその5年位前に、非公式ではありましたが当方から逆にほだ木を提供したいがどんなものか、とシイタケの関係者に打診したことがありました。しかし当時は十分なほだ木の供給があるという理由で実現の糸口にもつかなかったのです。

作業と発生材については、コナラの雑木林を間伐したい当社がいて、一方に間伐材を利用したい人（シイタケ農家）がいて、そしてもう一方には作業を請け負う人がいて、お互いがほどほどに得るものがあればいい訳です。作業は当社の関連会社であるK社が、冬期間の職員の手頃な副業として対応してくれることになり、平成4年の12月に間伐が始まったのです。

参考までに大まかな作業の実績を表-1に示します。

表-1 保育作業のあらまし

項目	H4年度	H5年度	H6年度	H7年度
期間	H5/3	H5/12~	H7/3	H8/1,2
面積	1.06ha	2.12ha	0.94ha	5.0ha
ほだ木	1050本	3300本	570本	3000本
薪炭	13m ³	67m ³	12m ³	122m ³
作業員	16人	45人	20人	80人
着工前φ	11.0cm	11.3cm	14.9cm	(不明)
着工後φ	13.3cm	13.0cm	15.2cm	(不明)

平成4年度から6年度までの作業の経費と売り上げについては、毎年諸経費に相当する分が赤字でした。また7年度は、記録的な大雪で作業が手間取り、30万円程度の持ち出しとなりました。結局、事業収支という点ではやはり間尺にあうというものではありませんでしたが、雪の少ない普通の苫小牧なら収支はほぼとんとんと見たK社は、今後も継続することになっています。

木を伐るのは悪いこと？

広葉樹林の手入れを始める前段の話も少ししておきます。

苫東の緑地内における樹木の伐採をとまなう行為は事前に関係者の了解を得なければなりません。広葉樹の天然林を除間伐するという計画も、まず何故それが必要か、樹林地の維持に障害はないのか、というような点で少しずつ説明をする必要がありました。カラマツの人工林ならば間伐をしなければならぬ、ということが何となく了解されていますが、こと広葉樹林となるとほとんどコンセンサスはできていないのが現実です。はっきりは言えませんが、木を伐ることは原則的に悪いことなんだ、という思いこみがあることも否めません。

また広葉樹林をどう扱っていくかというテーマは、野幌や知床における林の取扱いとも根本的なところでつながっているとわたしは考えていますが、手入れされた里山がどんなものなのか、身近なところで見られない訳ですから説得力のあるサンプルにも乏しいのが現状なのではないかと思えます。筆者の不勉強にもよりますけれどもいろいろなケースにあてはまるわかりやすいマニュアルというものも、まだできあがってはいないのでないかという気がします。

結局、筆者らが行った関係者への説明というのは、苫東における萌芽など植生復元力の実状と密度調整の内容についてでした。それは、苫東の雑木林が、このまま保全するというよりもむしろこれから育てる段階の林が多いという点をベースにしており、大木からなる林が将来とも続くことがねらいだということでした。つまり、木を伐って林を育てるということであり、その手法は技術的に蓄積のある林業のやり方にのっとるということに落ち着いてきました。

「現況の林は」「そしてそれをどうするか」

まず、現況の林を調べてみました。帯状区をとって実像をつかんでのち1000㎡程度の標準地をとって、林の混み具合を感覚的に強、中、弱の3段階に区分して選木を行いました。直径6cm以上の立木密度はhaあたり2000本から2500本で、間伐前の平均直径は約11cmでした。

図-1に平成4年に中程度の間伐とみなして行った林分の帯状区調査結果を、その林分の構成を表-2に示します。この林分を例にとると間伐前にhaあたり2450本だったのが1040本になりました。また直径は間伐前に平均10.8cmだったのが13.2cmになり、コナラとミズナラの混在率は各々29%、4%でした。苦東の台地上の広葉樹林はおおむねコナラが卓越し、多いところでは70%にも

達することがあります。他の3箇所の調査地でもコナラが48~52%で、ミズナラはいずれも10%以下でした。

この作業では

- ・萌芽した株の本数を減らす
- ・樹冠が重なり合ったものを疎開させる
- ・傾斜木、不良木などを除く

をめやすとして抜き伐りするよう、現場の人と打ち合わせて仕事にいたしました。選木はどうしてもいつも少な目になってしまいます。もっともっと、と時々かけ声をかけるのがわたしの役目になりました。かつて、数年にわたるカラマツの間伐の直後に大面積の風倒被害を経験した記憶が、わたしたちを少し憶病にさせているようでした。ですから「抜きすぎて倒れないか」「風が入りすぎないか」という現場の人の心配は無理のないこ

とだったのですが、苦東以外のいくつかの事例も見せてもらいながら、「万が一多少伐りすぎても林は枯れないから大丈夫」という変な自信もつき少し安心できるようになってきました。

2シーズンの作業を終えた段階で胆振東部

表-2 調査区の林分構成 30m×30m ()内は残した本数

spec	φ	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	total
コナラ	1	5 (1)	5	6 (2)	12 (4)	10 (10)	8 (7)	5 (5)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	55 (32)	
ミズナラ	1	1	1	1 (1)	2 (2)	1 (1)						8 (4)	
エゾヤマザクラ	4 (1)		1	2				1 (1)				8 (2)	
ミヤマザクラ	1	3	1	2 (1)								7 (1)	
ヤマモミジ	18 (4)	5 (3)		1 (1)								24 (8)	
イタヤカエデ	13 (1)	7 (3)	6 (4)	1 (1)	1 (1)							28 (10)	
アズキナシ	17 (1)	7	5 (1)	2 (2)	5 (5)	1 (1)						37 (10)	
サウシバ	1		2	1 (1)								4 (1)	
センノキ		1		2 (2)	1 (1)							4 (3)	
カシワ	1			2 (1)	1 (1)							4 (2)	
キハダ		1										1	
シラカバ							1	1			1 (1)	3 (1)	
アサダ			1		1 (1)							2 (1)	
ヤマウルシ	1											1	
バツコヤナギ		1		1								2	
total		58 (7)	31 (7)	22 (5)	21 (11)	22 (14)	14 (13)	11 (9)	5 (5)	1 (1)	1 (1)	2 (2)	188 (75)

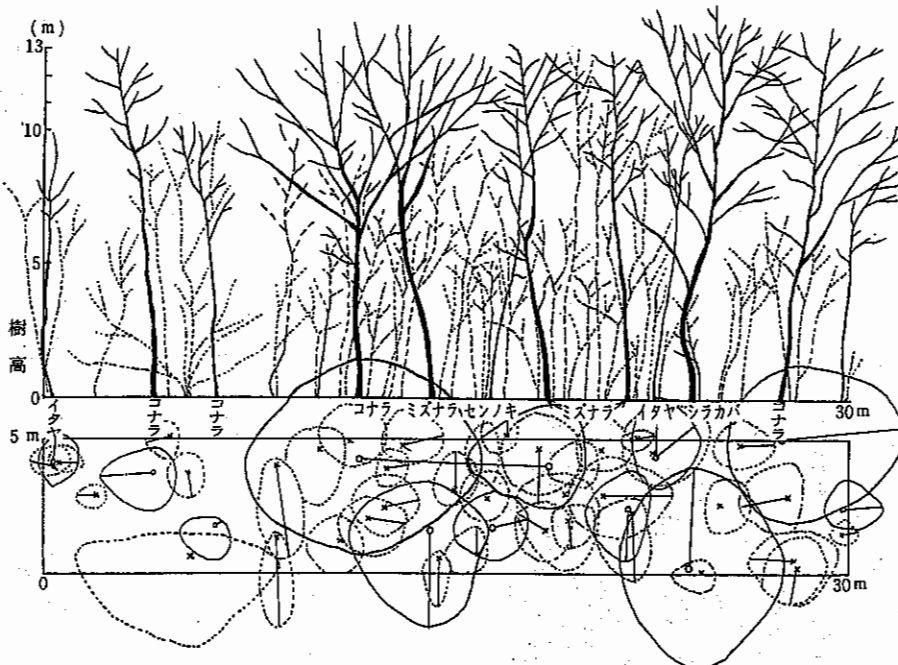


図-1 帯状区の調査結果 (平木沼緑地B調査区)

林業指導事務所の諏佐前所長に収量密度図（密仕立て）でチェックしてもらったところ、強めに間伐したつもりの箇所がちょうど良い結果となっており、そのほかの箇所は抜き方が足りなくて間伐の効果があまりないことがわかりました。また、公園利用する箇所などはさらに見通しの良い強度の間伐も検討する必要があるように見えます。

ともかく、林の現場で仕事をする方々の木々への思いやりはもともと定評があり、林の取り扱いでどうしたら良いかという林の中の検討会は実に心おどるものです。こんな機会を与えられたことは大変幸運なことだと感謝せずにはいられませんでした。

保育のその後

見てもらうのが一番、といういわばモデルづくりがこの雑木林の間伐の大きな目的であった訳ですが、その秋には手入れの有無について早速目に見える違いが出てきました。

苦小牧と厚真の境界道路に沿った保育地の向かい側は同じような樹種構成の保安林で、こちらを比較のための対照区とみなしていたのですが、萌芽するままでの二次林は紅葉が黒ずんで沈んだ色調で、一方の間伐したエリアは鮮やかな黄色と真紅の紅葉を見せました。

もちろん、作業の時には珍しい樹種は伐らずにバラエティーをつけようとしたことほかに、カエデ類やサクラなどを少し特別扱いにして陽光の当たるように残してきましたから、そんな効果が早くも見えてきたと考えられました。

このような目に見える変化は、社内の人たちだけでなく関係する色々な方々にも見ていただく機会が多くなり、今では間伐の成果を手っ取り早く見てもらう格好の場所になっています。



写真-2 雑木林は気持ちいい

間伐は、このようにして北へ向かって少しずつ進んでいますが、平成6年からは「雑木林ワーキングサークル」と称して、間伐前の除伐作業を苦小牧と札幌の雑木林ファンと行うようになりました。アンケートにも協力してもらうち、この作業がマチの人と林や「緑」を結ぶ接点になり得、かつ今日的な側面を過分にもっていることがはっきりしてきました。とりたててグランドワークなどと呼ぶつもりはありませんが、どうやらそれに近い芽がここには隠されているように見えます。

雑木林を取り扱う技術的な面で、諏佐前所長には色々教えていただきましたが、わたしたちの間伐の内容を検討した結果では方法論的に特に間違いはないと明言され、公園的な利用をめざすゾーンではもう少し疎林に仕立ててもよいのではないかとアドバイスを受けました。その際、「理論は現実を後追いするんですよ」とつけ加えられましたが、各々固有の現場で森づくりに関わるものにとって、この言葉はひとつの励ましになるのではないかとうれしく聞いたものでした。

また、里山におけるほだ木や薪炭材採取と保育が相互依存してかつての里山が維持されたとすれば、昨今は新しいギブアンドテイクの関係をどこかに探さなければなりません。中心となる担い手はやはり農林業に携わる方である訳ですが、一方には非農林業の方たち、都市部の一般市民とのつながりも可能性を秘めているように見えています。気の長い課題ですが、そのためにも手入れされた里山の雑木林があちこちに実在することが雑木林のファンづくりに最も近道になるのではないかと考えられる訳です。

以上、雑木林という空間の「雑木」と呼ばれる広葉樹の扱いについて、関わってきた苦東の現状を述べてみましたが、雑木林はひとつの「しくみ」ではないか、という印象を強くしています。哺乳動物、鳥類、数多くの昆虫、菌類など、かつて一般論として語られていたことがらが苦東の雑木林では実際どうなのかという点も興味深いことで、それらもこれから全体像として次第にわかっていけばいいと考えています。

最後になりますが、苦東における雑木林の間伐のスタートから、現場で木々の一本一本を相手に山仕事を続けてこられた斉藤泉さん、及川明さんに心からねぎらいの心を表したいと思います。

（苦小牧東部開発係）